



宋時烈及び孝宗における尊明意識：「春秋の大義」への評価を中心に

著者	太田 誠
雑誌名	国際文化研究
号	20
ページ	31-44
発行年	2014-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/57218

宋時烈及び孝宗における尊明意識

——「春秋の大義」への評価を中心に——

太 田 誠

要 旨

宋時烈に対しては学者としては当代を代表する存在として誰もが認めた。特に政治思想の基柱として孝宗を輔弼した。ところが、その政治思想の本体であった「春秋の大義」については両者間に乖離が認められる。「春秋の大義」の評価は、すでに秦漢以前より分かれていたように、朝鮮においても相反する両派があって、これは、清への反攻論議（北伐論）を左右する、当代の政治方針策定においての決定的要素となる。宋時烈はこの点で孝宗と志を同じくしていたと縷々述べ、また孝宗の考えも宋時烈と同じであったと語っているが、孝宗自身はその治世下ではまさに真逆の態度を取っていることが確認できる。

キーワード：宋時烈／春秋の大義／尊周攘夷／斉の桓公／北伐

1. はじめに

女真（後金／清）との和睦に抗して大義に殉じた洪翼漢の事跡は宋時烈の撰した『三学士伝』に『洪翼漢伝』として納められている。今、『宋子大全』でも確認できるが、すでに17世紀に古活字版本として独立して上梓されており、記録文化として『宋子大全』に保存されているものよりは、単行されているこの古版本のほうがより多くの読者に親しまれたと見るべきであって、この意味ではまさしく文学作品でもあったと言えよう。また、これを文学作品と捉えて、「荒唐無稽な稗説」という評価のもとにその虚妄性を言う研究者もいた¹が、現在では、その後に発見された『洪翼漢伝』収録の「抗虜之書」の分析から、以下に記すような事実関係が確認されたことに依って、そうした見方は完全に清算されている。むしろ、諸資料と突き合わせながら、立体的に整理していくことによって、この物語の歴史事実としての真実性を確認することができる。

第一に、『洪翼漢伝』は歴史叙述という面から見れば確かに李朝唯一の「正史」である『実録』からは外れている野史ではあるが、しかしながらそこに記述された洪翼漢の朝廷内における言動およびその主張（斥和論）そして朝廷における洪翼漢への応対・措置は、国朝の權威によって真実の記録であることを担保する正史（洪翼漢の場合は『孝宗実録』）の記述と一致している。そして瀋陽に到着して以降、金汗（清朝二代皇帝太宗〔ホンタイジ〕）との激烈な応酬を経て、最期を遂げるまでの局面については、同伝内において

公が抗虜の書、即ち張超の伝えて来たりしところのものなり。公が蒼頭の拘えられし以前、終始公に随い、目撃して帰り、これを言えり。また、公が日記を以て来たり。華人の公が義を慕いし者、多く我人が為に其の事を此の如く説けり²。

と言う。つまり、言葉の遣り取りではよく通じない（語音不相慣曉）ので、洪翼漢は自ら漢文で記述（索筆書紙）し、以て金汗ホントイジの問いに答えた「抗虜之書」は、張超に渡され、さらに本国に伝えられたという事実が従者蒼頭によって目撃されている。そして、この事実は「抗金汗書」として洪翼漢の『花浦遺稿』巻之三に載せられ、後代に伝えられている。

また、第二に、『洪翼漢伝』に見える洪翼漢の言動の軌跡については、彼がしるしつづけた日記すなわち「北行録遺筆」（『花浦遺稿』遺筆）の所述と一致している。このように、洪翼漢の事跡が史実に合致している事実は、現在では周知のことであって、決して「荒唐無稽な稗説」などとは言えない。すなわち、宋時烈は、極めて努めて、「本当のところ」をしたため、その壮絶さの迫真性を説くことによって、読むであろう者たちを自らの情念の世界にまさに誘い込もうとしたと思われる。宋時烈にして見れば「情念」などと言われては心外であろう。むしろそれはちょうど、当然のこととして儒教的人格が存してそれを全うしていると言うべきであって、その儒教的人格のしからしめた洪翼漢の行動が、後にこの事実を知るに至った者たち、すなわち、王およびその臣僚たちを「三学士」の話として感動させたがゆえに、『三学士伝』が作られた十年後の辛酉歳（1681年）に洪翼漢ら三学士の祠の建立などの顕彰がなされたのである³。そして「感動」の実態とは、同伝の本文中にも掲げられた「春秋の大義」である。宋時烈は、読むことができた者たちの精神の中にも、至上価値としての「春秋の大義」が育まれていくことを期待したからこそ、洪翼漢の最期の場面において、彼が金汗ホントイジに叫んだ言葉が、‘我之所執者。只大義而已。’であり、そしてその具体がこれに続く、いわゆる「抗金汗書」である。つまるところ、同伝のクライマックスはここにあり、そして、まさしくここにこそこの作品の主題があると言うべきものである。政治家宋時烈は、みずからの政治思想の最高原理によって、洪翼漢の‘執るところは大義のみ’という叫喚を際立たせたとも言える。この時代の潮流と成ったのは、保守の思想である「春秋の大義」から導き出される「尊周（尊明）」政策であった。孝宗が徹底して持ちつづけた北伐政策の中で、この「春秋の大義」に裏打ちされた尊明政策が如何に展開していったのか。本研究においてはこうした点が解明されなければならない。

2. 先行研究の点検

既に定められている紙幅制限から、対明スタンス、就中「春秋の大義」に焦点を絞った先行研究として代表的なもの2点を検討するに留めざるを得ない。まず、鄭玉子「兩亂亭 對明義理論의 전개」⁴である。本件研究のテーマは、その中心課題である宋時烈における「春秋の大義」の（孝宗に対する）唱導および「北伐」、そしてこれらの関連相の正確な把握によって解明されるものであって、これらの事象が展開された同時代（仁祖、孝宗、顯宗代）の動態を見極めることが中心である。本研究に関わる限りでは、鄭玉子該編所述の「報恩」なる術語の問題、そして政治家宋時烈における「北伐」および「春秋の大義」の現実の政策選択の問題である。該編におけるこの両件の問題を論じるだけでも本件論文の所定の紙幅は不足すると思われるので、要点のみ記す。まず、「報恩」の思想は儒教から導き出すことはできないという点である。つまり、先秦に成立し、以後唐代に經典化さ

れた儒典に共通するのが「報恩」という術語(言語形態としての二字の熟語と言語概念としての含意)は無いということである。以下に述べるところは、朝鮮の「報恩思想」に関わる研究では最初の成澤 勝「朝鮮時代の孝思想」⁵⁾による。宋時烈はもちろんのこと、朝鮮では学者のみならず官僚たちも、聖人として最も崇めそして従ったのは孔子である。孔子が自ら

恩なるものは仁なり⁶⁾。

と言い、同じく孔子自身が

子、曰く、〈中略〉仁を為す(あるいは‘仁為る’)⁷⁾は己に由りて、人に由らんか⁸⁾。

と言うように、仁(の範疇にある恩)は他人が何かを為したから発動するのではなく、あくまでも自分自身に由来して出てくるものであると理解することができる。言い換えるならば、「報恩」とは誰かに何かをしてもらったから(ありがたいから)、それに「お返し」ということであって、儒教の伝統ではないというのである。あくまでも恩を発動する本人(主体)の人格として現れ出るものであると言う。それがいずれかの時期において、「お返し」的概念が紛れ込んだとする。それはパーリ語でいう仏教の‘kâta(してもらったこと)’の概念に由来する「四大恩思想」の影響とする雲井昭善の説⁹⁾を引用して説明している。そして朝鮮における本格的な報恩思想は李珥によって論理的に整理されたとしている。

たしかに宋時烈は、金長生の門下に在ったわけで李珥の学統と言えよう。しかしながら、宋時烈には報恩の概念は検知できない。宋時烈は、特に明と朝鮮の関係を明太祖洪武帝(朱元璋)・朝鮮太祖康獻大王(李成桂)以来、以下の図¹⁰⁾のように捉えた。

分 限	義 道理としての精神	具現的行為
君 ⇕ 臣	恩 君 ⇕ 臣 節	字小 君 ⇕ 臣 忠貞

すなわち、恩は主君の自己発動の義であり、節は臣下の自己発動の義であって、「報いる」と捉えた瞬間に「義」の主旨が失われる。したがって節の一具象が忠貞なのであって、字小に応えるための行為なのではない。そしてこの影太線部分(恩と節の交流)が「礼」なのである。つまり、「報いる」という行為はそこには介在しないのである。本件研究はこの立場を取る。

恩は「報いる 答는다」という概念のもとでは扱わず、あくまでも「認識する」「称える 기린다」対象である。頑なな程までに孔子に従ったとも言えよう。すなわち、宋時烈を「報恩」の文脈に位

置づけることには無理があるのである。該編も18世紀の大報壇に関しては‘덕의 (徳意ママ) 를 가지고 있다 (徳義を称えている)’としている。

次いで、該編所述の、宋時烈・孝宗による「北伐」および「春秋の大義」の現実の政策選択の問題である。これは次章以降において詳述することになるので、ここでは該編の評価に留める。該編は、「北伐」および「春秋の大義」が宋時烈と孝宗に共通した理想であり、いずれ実行されなければならない政策課題であると認識している。宋時烈を北伐実行論者と捉えるのは韓国の学会の宿謬である。どうもそのような「思い込み」が支配しているように見えてくるのである。先行研究として挙げるのを省いたが、他の先行研究もおおむねこうした認識である¹¹。本件研究はこうした認識を覆すところに、一つの研究の意義を置きたい。また、この先行研究には孝宗の意図・心情に関する詳細な分析が無く、宋時烈との同期状況を提示していない。本研究においてはこれの索出も試みる。

次に、2件目は邦語で接しうるものを挙げるが、記述の不正確さが見られ、また注も無く、所説の根拠も示されていない。したがって先行「研究」と一旦カギ括弧付きで挙げておき、エッセイと見たい。すなわち、金容権訳「李成茂〔北伐、孝宗と宋時烈の同床異夢〕」¹²である。高麗が踰年称元の制を採っていて、元号（廟号）は王の即位の翌年から始まる。つまり、即位の翌年が当該元号の初年すなわち1年である。李朝も、元号こそ用いなかったが、王の即位翌年を初年すなわち1年（元年）として起算した。したがって孝宗の即位した1649年を「孝宗1年」としたのは誤りで、「孝宗即位年」としなければならない。こうしたところからも朝鮮史を論じた「学術論文」とは見なし得ないが、邦文で出されていることから、日本国内での影響性という面でもこれに触れざるを得ない。この中で特に指摘しなければならない点は、孝宗と宋時烈の同期状況と思しき言及はあるが、単に「同床異夢」を断定しているだけである。この「同床異夢」論は、本件研究では清算しようとするものであるので次章以降において詳しく論じる。

3. 宋時烈の大志と孝宗

孝宗は父仁祖の雪辱を期した出師を実行すべく、薨じるまでその理想・計画を堅持してきた。これは諸先行研究の一致した見方である。しかしながら、孝宗のこの理想・計画は宋時烈とは必ずしも一致しない。宋時烈はもちろん主君たる孝宗のこの悲願を端から批判し拒むことは臣下の礼としても一定の配慮としても不可能で、以下に証すように、一旦は（表面上は）理解を示しても、孝宗に説く締めくくりの言は放念を勧めることであった。まず、宋時烈は孝宗薨去の2年前の丁酉に、王の親展の密封書簡を上す。所謂1657年8月13日の「丁酉の封事」である。そこで、

所謂仁は父子より大なる莫く、義は君臣より大なる莫きは是れなり¹³。

と切り出して、

君臣の中、恩を受くること極り罔し。又た未だ本朝の皇明に若く有らざるなり。豈に麗の宋に比べんや。竊に聞けり、今日、一脈が正統、偏へに南方に寄れり。未だ殿下に已に麗朝の事有るを知らず。而れども機禁にして事密なり。群下に未だ知るを得ざりしか有り¹⁴。

つまり、‘朝鮮にとっての、明の恩というものは宋と高麗との間にあった事の比ではないが、これ

に仮託して、南方に逃れた明朝一族との連携はお考えになるべきである。ただ、事は機密を要することで下々にはまだ知られていないのかも'と言いながら、この君臣の義（すなわち春秋の大義）に依って明の恩に呼応するための軍事行動であるならば、

一国が軍民文武の中、豈に忠信沈密にして、応募して行くを願う者、無からんや。伏して乞うらく、殿下、黙して神機に運び、獨り腹心大臣と密議して、之を図られんことを¹⁵。

と、密かに計画を進めるべきであると認めている。この計画における自らの役割として、宋時烈も臣、驚劣と雖も、極めて、符を懷き、潛行して、以て吾が君が忠義の心を達せんと欲す¹⁶。と述べる。この丁酉の封事を録載する『孝宗実録』に孝宗の反応が記されていないが、この時のことを宋時烈が2年後に「樞対説話」として記録したものの中に、孝宗の答えが確認できる。すなわち、「後金は首領も代替わりし、酒食に耽け、勢いを失っている。いずれ必ず天の時、人の動きが好転するであろう。今確実に軍兵を養っており、当方で納めた歳幣もまだ遼東と瀋陽に留め置かれており、それらを押さえれば軍資として使える。彼らに油断のあるうちに今こそ北の関に奇襲を掛けるべきである。今は、為さないことを憂うべきであって、為しがたいことは憂えない。」¹⁷と開戦をせく一方、宋時烈が最も期待していた「君臣の大義」の理念については一切片言も出てこない。単に出師のみが意識されている。そしてつまるところ宋時烈は

万一蹉跌して、覆亡の禍有れば則ち奈何に¹⁸。

と対えた。すなわち、孝宗の軍事行動に理解は示したものの、もっとも重要な理念が置き去りにされていることから、「覆亡の禍」をかざして婉曲的に軍事行動の不可を宣言する。宋時烈にとって「春秋の大義」という理念の理解ができていない孝宗には、開戦させてはならなかったのである。そうして、孝宗が薨じると、現実として清朝への反攻という政策選択が消滅するや、今度は一転、「春秋の大義の聖君」像を描きはじめ、時に春秋の大義の理念の体現者として、「さらに永く存命であったならば勇敢に北伐を実現したであろう」と説いた¹⁹。宋時烈自身は後金征伐を自らの言葉としては「北伐」と表現せず、「遠略」と述べている。すなわち「昔我聖考思弘遠略。」²⁰と明かす。丁未歳すなわち1667年は顯宗朝であるから「我が聖考」とは孝宗のことであり、「遠略」とは、周の宰孔が斉の桓公を「徳を務めず遠略を勤しみ、北の方山戎を伐つ」²¹と言って「北伐」を非難して用いた、含意性の強い術語である。宋時烈は、はやる孝宗に朝鮮の国内外の状況を示すことによって、軍事行動を思いとどまらせる一方、どうしても尊周（尊明）としての「春秋の大義」を孝宗に理解させ、受容させ、精神的体質化を成就させなければならなかった。ところが孝宗は、後述するようにこれにも振り向くことはなく、却って「春秋の大義」の根拠となった歴史事実を逆に解する説に同調する。孝宗薨去後は、宋時烈はあたかも孝宗が「春秋の大義」を篤く奉じた節義の明君であると説きつづけたが、そこには宋時烈の一定の他意があったと見なければならない。つまり、孝宗の顕彰あるいは宗廟正殿への附廟という宿願があり²²、どうしても明君聖君とする必要があった。

4. 時代に対する宋時烈の思想的位相

丁卯・丙子の両難に際し、一貫して「尊周攘夷」を掲げつつも、朝鮮は講和・斥和に朝廷の議論

が割れていた。仁祖治下において、後の孝宗たる鳳林大君に仕え、その被虜以前において傳育の大任にあった斥和派宋時烈は、同時に鳳林大君にも大きく思想的影響を及ぼす地位にあり、その事業を自らの最大任務の一つと認識していた。したがって、当然鳳林大君も尊周攘夷そして春秋の大義のイデオロギーへと導かれていったと推測できるが、事実はどうのようなものであったろうか。

「尊周あるいは尊王攘夷」は、春秋期には周室に対する尊崇であり、周室の天下を脅かす外敵の排除であったが、朝鮮においての実体は、高麗期には宋室に対する尊崇およびモンゴルに対する排斥であり、李朝の壬辰丁酉の戦役期には明室に対する尊崇および倭の排斥、その後は女真への抵抗・排斥であった。仁祖の反正のみならず多くの場面で功績のあった当代政策の最高位決定者であり、鳳林大君の世子冊封とともに世子師となった金瑬の、三田渡事件を機にした対清講和という方針転換にもかかわらず、与野において「尊周攘夷」は隠然と士大夫たちに共通した思想的基盤となりつづけた。ちなみに金瑬が世子師に任ぜられる前の、鳳林大君時代の師傳は宋時烈であった。ところが、即位して王となると、孝宗には宋時烈を出来れば避けておきたいという意識が伺える。『孝宗大王実録』は、即位直後の孝宗の対宋時烈行動を伝える。すなわち、

掌令宋時烈、召されて赴朝す。累々上章して還えるを乞えるも、優批して許さず。是こに於いて時烈詣闕して命に謝し、仍って入対を請う。上、適々疾有りて見れず。時烈、台庁より朝衣を脱いで直に国門を出で、投疏して去る。上、大いに驚き、即ち六承旨を召して、謂いて曰く、時烈、予病みて未だ引接せざるに因って、遽に帰計を決す。誰か能く予が為に之を留めんや、と。同副承旨金益熙、素より時烈に親しめば、請うらく、聖旨を以て追及んで之を諭さん、と。上、喜んで、之を許す。時烈、上意の甚だ懇なるを聞き、還って城外に到り、陳疏して謝罪し、仍^{なお}帰るを請いて、愈々力む。上、政院に下教して曰く、予の賢を待するや、誠せずと謂うべし。平日が敬礼の意、以て自ら暴く無し。承旨、予に代って草教し、諭すに至意を以て山林が高世の士をして、少しく退心を回さしめよ、と。特に禮曹郎官を遣りて、時烈に伝諭せしむ。時烈、已に投疏して去れり²³。

と見え、宋時烈と鳳林大君(孝宗)の間に、必ずしも蟠り無く親交が重ねられていたとは言いがたく、少なくとも孝宗において、宋時烈に対して昵近感を持っていたとは見なしがたい。宋時烈にとっては本意ではないはずのすれ違いすら確認される。宋時烈も宋時烈で、孝宗の若さや王たる地位や取るべき行動に熟していないことへの寛容さ、「慈」の心情が一切見られない。峻厳であったと言ふべきであろう。王を含めた周囲の評価を背景に「賢」を自ら嵩に着て勢う姿勢からは、「主君を慕う心情」など伺い得ない。このように両者には心理的な距離関係が確認できるということをまず示しておく必要がある。

こうした距離関係が、現実の特に政治的思想においてはどうかであったのか。つまり、「春秋の大義」のイデオロギーはどうかであったのかということである。

仁祖が逝き、やがて孝宗代に入ると、政権は鄭太和や宋時烈らの手に移る。すでに前項で説いたように、清の朝廷に対して反抗せざるを得ず、さまざまな側面で‘面従腹背’の社会を迎えるなか、尊周(=尊王、尊明)はいよいよ陰に籠もるが、特に宋時烈においては、その著述は尊明に徹

底していく。そしてまた一方では、宋時烈が政治家として力を注いだのが孝宗を支えることであった。この事実は、孫弟子の尹鳳九あるいは『孝宗大王実録』によれば、臨終に際して弟子の権尚夏に、その手を執って

臨命の時、門人権尚夏の手を執り、これに托して曰く、学問はまさに朱子を主とすべく、

事業は則ちまさに孝廟の為さんと欲するところの志を以て主と為すべし²⁴。

と託し、しかも「孝宗のなさろうとした」その「こと」について、宋時烈の孫弟子（すなわち権尚夏の弟子）尹鳳九は

それ孝廟の為さんと欲せしところは、すなわち春秋の義なり²⁵。

と断定しており、また宋時烈自身も

我が孝宗大王、天縱の聖きをもって陽九の世に当たり、天地の翻覆を痛み、冠履の顛倒を憤り、春秋の大義を乗る²⁶。

あるいは、

我が孝宗大王、藩邦をもって春秋の大義を明かす²⁷。

と、言い切っている。しかし、すでに上述したように、孝宗が薨じるや宋時烈の朋党は孝宗賛美に徹底する。これらはいずれも孝宗没後の孝宗賛美文であり、それが目的となって説かれたものである。孝宗没後、孝宗の評価については例えば『顕宗実録』の改修騒動からも分かるように、朝廷を二分するほどに分かれた。

この春秋の大義が朝鮮の丙子の戦役後における有力臣僚宋時烈の外交政策を支えた彼自身の中心思想であったと同時に、このように孝宗没後には、宋時烈およびその門下は孝宗をまさに春秋の大義をもって王業に努めた人物として描いている。この記事を載せる「自耽羅就拿出陸後遺疏」は、「己巳五月」とあるように宋時烈が流配地済州から漢陽に向かう途中の井邑で賜死する直前の、最後の疏（いわゆる「遺疏己巳六月」）に一本先んずる疏であって、まさに最も彼の心情を実写しているものと見なさなければならない。そして特に洪翼漢に対して孝宗は

洪翼漢等三学士、権順長等三儒生の死、及び砲手李士龍の死に至りては、また足りてもって春秋の義に光る有り。〈中略〉孝宗大王、すなわち聖心はこの大義において、皎然たること青天白日の如し²⁸。

であったと、宋時烈は顧みつつ、もっぱら孝宗のこの春秋の大義の「聖心」ゆえに孝宗を評価し、尊敬したと（弟子らによって）評され、また自ら語っている。すなわち臣下が主君に対して直に呼びえないにしても、後世の第三者から見れば、孝宗は「春秋の大義」という、政治的理念でもあったイデオロギーにおいて宋時烈の「同志」であったと見なされうるはずのものだったのである。現実はどうであったか（この点については後述）は別にしても、少なくとも宋時烈（を含むその一門）は、そのように認識していざるをえなかったことは明らかである。

宋時烈が認識したかった孝宗の「春秋の大義」は、宋時烈自身が唱導したものでなければならなかったのである。すなわち、

孝廟に大志有り、時烈の與に事を共にすべきを知る。金益熙を遣わし、密かに聖志を諭げ、

遂に契合隆重して、これを称するに先生をもってし、特に独対を賜う。また夜顯廟に命じて親しく御札を伝う。時烈、感激奮厲して、自ら樹つるに春秋の大義をもってす²⁹。

と、宋時烈が孝宗に春秋の大義を教え、刷り込もうとしたことが明らかである。

そこで、宋時烈の言う「春秋の大義」なるものの実体が問題となる。それ自体は解釈する立場によってさまざまな意味を持ってくるが、宋時烈は

夫子の功、未だ春秋より大なるは有らず。しこうして、春秋の義、未だ尊王より大なるは有らず。〈中略〉春秋の義の炳然たるは數十。しかるに尊王の義は最大なり³⁰。

あるいは、

春秋の義の炳然たるは數十。しかるに尊周は大たり³¹。

と言うように、宋時烈にとっての「春秋の大義」は『春秋』に記された尊周（尊王）の史実に由来するもので、つまり、『春秋左氏伝』僖公九年の記事に依っている。その「伝」では、

夏、葵丘に会して、盟を尋ね、かつ好を脩む。礼なり。王、宰孔をして齊侯に胙を賜わしめて、曰く、天子、文武に事有りて、祭事有るなり。孔をして伯舅に胙を賜わしむ、と。齊侯、将に下拝せんとす。孔、曰く、且つ後命有り。天子、孔をして曰わしむ。伯舅が耄老するをもって、加勞して一級を賜いて、下拝すること無からしむ、と。対えて曰く、天威、顔を違らざること咫尺。小白、余敢えて天子の命を貪りて、下拝すること無くば、恐れらくは下に隕越して、もって天子に羞を遺らんことを。敢えて下拝せざらんや、と。下拝して登りて受く³²。

と言い、そして、さらに同「経」においては、僖公や覇者齊侯とともに葵丘に会した諸侯として宋子・衛侯・鄭伯・許男・曹伯を列挙している³³。つまり、葵丘において、（春秋時代において一頭地抜きでた実力を有する）齊侯（すなわち名を小白と称した齊の桓公）が、そのほかの国々とともに、（すでに弱体化していながらも天子の国である）周の王に忠誠を誓ったと言うのである。この史実は、以後、葵丘の会盟として知られ、国の勢いの大小・強弱に関わらず、主君（この場合は周王室）への忠誠を厳守する事例として朝鮮においても登場し、「尊王」の原点として扱われ、「忠義」の象徴とされる。桓公は同時に「攘夷」として西伐、南伐、そして「北伐」をも実施し、女真による清建国後の李朝の「北伐」の術語の言語形態的拠り所となった。つまり、丙子の戦役後の北伐論の思想的拠り所は、まさしくこの「尊周攘夷」であった。正祖の『尊周彙編』を俟つまでもなく、ここで朝鮮の言う「尊周」は「尊明」であり、「攘夷」は「女真／後金排斥」であって、この概念は多くの文集類で取り上げられた。このように、朝鮮において、後金の興隆（「称帝」）を認めず、徹底して明室を尊崇した、その論理的拠り所が上述の齊の桓公の史実であり、これに対する評価術語が「春秋の大義」であったのである。

すでに述べたように、宋時烈は、当代における「春秋の大義」の権化として孝宗を祭り上げ、もって孝宗をさらに権威化していったと言うべきである。ここで「権威化」というのは、たとえば、孝宗を永寧殿ではなく正殿（宗廟本廟）に永代祭祀することを主張した宋時烈の孝宗祔廟論³⁴等からも明確である。つまり、朝鮮国の、国家としての至上の仁義は、周の系統にある「華」に対しての

「尊崇」「事大」であって、その価値認識から見た場合、それまでの朝鮮王のなかで孝宗こそが最大の存在であると、宋時烈は見なしたかったのである。それは、単に思想的当為性に因るだけでなく、それまでの間、明の歴史的恩義（字小、再造藩邦等）が現実として存在したことも大きな動因であった。

5. 春秋の大義をめぐる史実の二面性

しかし、果たして孝宗は、こうして宋時烈が評するように斉の桓公に由来する「尊周」としてのこの「春秋の大義」を確実にイデオロギー化していたのであろうか。つまり、斉の桓公の事跡を、宋時烈が評価したように認識していたのであろうか。

たしかに、当代にあって上述の斉の桓公の故事は「春秋の大義」として評価を博した一面はあった。たとえば、中樞府の当代の領事（正一品）であった李景奭は

仁義の説、世に行われずして久し。人に仁義を談ずるもの有れば、則ちこれを聴くもの必しもって迂焉と為す。孰れか能く従いてこれを為さんや。しかれども、桓・文、これを仮りて、諸侯を伯す。唐太宗、これを勉めて太平を致す³⁵。

と言って、覇者としての桓公の事業を評して孝宗に説いた。

しかし孝宗自身は、斉の桓公の事業については、周室への忠誠を述べたいいわゆる「春秋の大義」ではなく、むしろそれとは相容れない、やはり『春秋左氏伝』の言う斉の桓公の別の側面に同調している。

孝宗による斉の桓公の事業の評価を定めるに先立ち、「桓公の別の側面」がもう一つの論点として提示されなければならない。『春秋左氏伝』は、先の僖公九年の記事に続いて、以下のようにも言う。すなわち、

秋、斉侯、諸侯に葵丘に盟いて、曰く、凡そ我が同盟の人、既に盟うの後は、言に好に帰せん、と。宰孔、先ず帰る。晋侯に遇いて、曰く、会すること無かる可し。斉侯、徳を務めずして遠略を勤む。故に北、山戎を伐ち、西、この会を為せり。東略せんは知らず。西は則ち否らじ。それ乱を在わんか。君、乱を靖むることを務めよ。行くことを勤むること無かれ、と。晋侯乃ち還る³⁶。

と、斉の桓公の政治姿勢（人格的欠陥）を強く批判する。その挙措を「大義」を具備した人物のものとは見なししていない。このように、『春秋左氏伝』において両面性が説かれた斉の桓公への評価は、儒家の中でも分かれる。むしろ時代が下るに伴って変化してきたとも言えよう。

そもその孔子の認識としては、『論語』に

子、曰く。晋の文公、譎りて正しからず。斉の桓公、正しくして譎らず。子路、曰く。桓公、公子糾を殺す。召忽、之に死し、管仲、死せず。曰く、未だ仁ならざるや、と。子、曰く、桓公、諸侯を九合し、兵車を以てせざるは、管仲の力なり。その仁に如かんや、その仁に如かんや。子貢、曰く。管仲は仁者に非ざるか。桓公、公子糾を殺すに、死する能はず。またこれを相く。子、曰く。管仲、桓公を相けて、諸侯に覇たらしめ、天下を一匡す。民、今に到るまで

その賜を受く。管仲、微りせば、吾、其れ髪を被り、衽を左にせん。あに匹夫匹婦の諒を為すや、自ら溝瀆に経れてこれを知るもの莫きが若くならんや³⁷。

と言っており、明確に斉の桓公の「仁」を認め、「覇」の側面も含めたその為政を高く評価している。その孔子が『春秋』を編んで、桓公の記事をしたためたのであるから、桓公に対しては『論語』の延長上の評価が為されていると見ざるをえない。ところが、戦国時代になって孟子は、

（斉の宣王に）孟子、対えて曰く、仲尼の徒に、桓・文の事を道う者無く、これを以て後世に伝うる無し³⁸。

と言い、董仲舒も荀子の見解を³⁹踏襲するかのよう、

仲尼の門、五尺の童子も五霸を称するを羞ず。為すに、それ詐力を先んじ、仁義を後にす⁴⁰。

と言って、桓公ら「覇」を唱えた者たちを批判した。さらに司馬遷は、

（桓公三十五年）秋、また諸侯を葵丘に会す。益々驕色有り。周、宰孔を使って会わしむ。諸侯、頗る叛する者有り。晋侯病み、後に宰孔に遇う。宰孔曰く、斉侯驕れり、弟は行無し、と⁴¹。

と、周室としては斉の桓公の尊王性を認定せず、むしろその驕慢さを指摘している。到底斉の桓公をもって「大義」の亀鑑とは為しうべくもない。

以上のように、宋時烈およびその門系の人たちが「春秋の大義」を示しているとなした斉の桓公の事例に対しては、孔子とそれより後の儒家たちの間では評価が真逆である。

6. 宋時烈および孝宗の「斉の桓公の事跡」の評価をめぐって

それでは、孝宗がはたして、これまで見てきたような宋時烈の示す「春秋の大義」すなわち斉の桓公の事跡を肯定的に評価していたのであろうか。

そこで、孝宗と鄭斗卿との遣り取りを記す『孝宗実録』の記事が注目される。すなわち、鄭斗卿が上疏して

伏して乞うらく、中主をもって自ら期する勿かれ。古聖賢をもつて的となし、志は則ち聖賢を志し、心は則ち孤寡不穀をもって自処されんことを。人君の過てるは、亢るより過ぐる莫し。是れを以て斉の桓公、葵丘に会し、驕色有り⁴²。

と言うと、孝宗は

陳ぶるところの言、至論に非ざる無し。予、用いて嘉尚し、体念せざる可けんや⁴³。

と答えている。つまり、斉の桓公の、「春秋の大義」とはかけ離れた鄭斗卿の否定的評価に対して、孝宗は「まことにもっともなことだ」と反応していることから、すくなくとも「春秋の大義」を盲信し、盲従していたとは言えず、むしろ斉の桓公の人格的・倫理的欠落の側面を一定の事実と見なし、批判的視座を明確にしている。つまり、このように見てくると、孝宗を春秋の大義の君主と断定した宋時烈の所述は、どうしても当を得たものとはいえないのである。孝宗・宋時烈を第三者から見た場合、到底孝宗が宋時烈の「同志」であったとは見えてこない。『実録』を点検する限りにおいて、孝宗自身が宋時烈の認識を是とした記事は見あたらない。むしろ、宋時烈の一方的な「希望的な現実」であったと見えてくる。

すなわち、あくまでも宋時烈の、期待値を達成事実と見なしつづけた結果と言わざるを得ない。まさに、傳育者としてその対象たる存在を人君たるべき理想的姿に完成させる責務にあった宋時烈は、孝宗の当然しかるべき様態をさも現実に存在したかのように思わざるを(言わざるを)得なかったのである。また、宋時烈がその言説として孝宗を「春秋の大義」の明君聖君と謳い上げたのが孝宗亡き後になってからであることから、現実の政治的責任として朝廷世論に「春秋の大義の明君孝宗」を認識させる必要があったと思われる。事実、宋時烈による孝宗の宗廟正殿祔廟や顕彰に向けた言説には常に「春秋の大義の明君」たる姿が描かれた⁴⁴。

宋時烈は、その任官初期から鳳林大君の師傅として仕えた。確かに鳳林大君としての幼少期においては宋時烈の人徳・学徳を慕っていた。しかしながら、自らが王朝の責任ある支柱になってからは、対清の言動に関しても相当に慎重になっていったのもまた事実である。すでに述べた孝宗と宋時烈と距離関係は、この場面でも確認できるのである。ただ、日常においては宋時烈とのあいだに間の取り方で逡巡したとは言え、孝宗は臨終の最期の言葉として、宋時烈と宋俊吉を枕元に召すよう命じた。窮極ではやはり最も頼った臣僚であったと言えよう。

7. むすびに

儒教国家朝鮮の外交はそれ自体が礼に則るべき政治課題であった。以上で見てきたように、当時代の対明事大外交、対日対女真交隣外交においても、礼思想のしからしめる政策に徹底しようとした宋時烈は、この思想の中軸である「春秋の大義」によった明室尊崇(すなわち女真酋長の称帝拒否)を掲げて、孝宗に対してこの論理の理解、受容そして精神的体質化(エトス化)を迫り、もって政策的展開を図ろうとした。この過程で、孝宗の悲願であり、終生計画を保持しつづけた「北伐」に対しても、表向き理解を示しつつ、結局は対清軍事行動に連なるような政策には制動的であった。この意味では「異床異夢」と言わざるを得ない。

ところが、薨去に至るまで孝宗には受容されえなかったにもかかわらず、あたかもこの「春秋の大義」こそ孝宗の中心思想であったかの如く言説を展開し、もって宗廟正殿への祔廟を主張したのである。宋時烈にとっては、見果てぬ夢であったものが、あたかも完成していたかのように、その立場を堅持しつづけたと言えよう。

また「北伐」も、宋時烈は北京落城のころまでは、所謂「斥和」の枠内で軍事行動を避け得ざるものと容認しており、三学士のみならず江華島城門で自爆をもって仁祖脱出を助けた金尚容らを悼んだ。北虜と呼ばれた後金軍は話し合いの対象とは見なし得なかったのである。しかし、後金の北京入城後になると攘夷(後金征伐)は不可能であるという現実を悟り、孝宗に対してこれを懇ろに論じた。その薨じるに至って今度は逆に両者が北伐の計画に勤しんだと言説を展開する。ここに政治家としての生きた姿を見る思いである。

註

1 三學士傳들 軍談小説은 결코 적은 배 아니나 모두 個人の 英雄的 傳記 그렇지 않으면 비록 그 것이 지나치

게까지 民族的 自矜을 強調하여 民族意識의 昂揚에 意識치 못한 功效을 나타냈다 할지라도 文學으로 본다면 너무나 荒唐無稽한 稗說에 지나지 못한다 함을 否認할 수 없을 것이다. (具滋均「蘆溪의 太平詞 … 戰爭文學考鈔 …」『京鄉新聞』1948年11月30日)

- 2 公抗虜之書。卽張超所傳而來者。公之蒼頭被拘以前。終始隨公。目擊而歸言之。亦以公日記而來。華人之慕公義者。多爲我人說其事如此。(韓國國立中央圖書館所藏版(請求記号「한古朝57~가399」)『三學士傳』{(朝鮮總督府圖書館登錄番号「古七一七〇」朝鮮總督府警務局寄贈本)} 所収)
- 3 斥和三臣吳達濟尹集洪翼漢祠。(李觀命「肅宗大王行狀」『屏山集』卷之九)
- 4 鄭玉子『朝鮮後期 朝鮮中華思想研究』一志社서울1998年
- 5 成澤勝『高麗・朝鮮時代 敘事文學發展의 研究』民族文化研究叢書67高麗大學校民族文化研究所서울1993年
- 6 恩者仁也。(「喪服四制」『禮記』)
- 7 ‘爲仁’については漢魏と宋代ではその解釈が異なる。成澤勝前掲書によれば、朝鮮では、李珥がその『論語栗谷諺解』において‘仁愼’と解していると言う。
- 8 子曰。克己復禮。爲仁。一日克己。復禮天下歸仁焉。爲仁由己。而由人乎。(「顔淵」『論語』)
- 9 雲井昭善「原始宗教における恩の思想」『仏教思想4』平樂寺書店1979年
- 10 欽惟我太祖高皇帝與我太祖康獻大王。同時創業。卽定君臣之義。字小之恩。忠貞之節。(宋時烈「己丑封事」『宋子大全』卷五)
- 11 丘冀錫「宋時烈의 政治思想」高麗大學校行政學科博士學位論文1999年(未公刊)等
- 12 金容權記「李成茂[北伐、孝宗と宋時烈の同床異夢]」『朝鮮王朝史』日本評論社2006年
- 13 所謂仁莫大於父子。義莫大於君臣。是也。(宋時烈「丁酉封事」『宋子大全』卷五)
- 14 君臣之中。受恩罔極。又未有若本朝之於皇明也。豈比麗之於宋哉。竊聞。今日一脈正統。偏寄南方。未知殿下已有麗朝之事。而機禁事密。群下有未得知耶。(同上)
- 15 一國軍民文武之中。豈無忠信沈密而應募願行者乎。伏乞殿下。默運神機。獨與腹心大臣。密議而圖之。(同上)
- 16 臣雖驛劣。極欲懷符潛行。以達吾君忠義之心。(同上)
- 17 彼虜有必亡之勢。〈中略〉前汗時專尙武事。今則武事漸廢。〈中略〉今汗雖曰英雄。荒于酒色已甚。其勢不久。〈中略〉天時人事。〈中略〉出其不意。直抵關外。〈中略〉我國歲幣。虜皆置之遼瀋。〈中略〉今日事。惟患其不爲而已。不患其難成。(宋時烈「輻對說話」『宋子大全拾遺』卷之七)
- 18 萬一蹉跌。有覆亡之禍則奈何。(宋時烈「輻對說話」『宋書拾遺』卷七)
- 19 嘗於萬壽殿開基之日。託以親自奉審。獨與可語諸臣。脫略堂陛。話語密勿明示聖志之所在。雖其群下之間。未有能當聖心而酬聖志。終以至於功緒不能卓成。然使其聖壽靈長。則其不但已也審矣。(「請以孝宗大王廟爲世室疏」『宋子大全』卷十七)
- 20 宋時烈「祭黃君美文」『宋子大全』卷一百五十三
- 21 齊侯不務德而勤遠略。故北伐山戎。南伐楚。西爲此會也。東略之不知。西則否矣。其在亂乎。君務靖亂。無勤於行。(『春秋左氏傳』僖公九年「傳」)
- 22 今我孝宗大王。論其德則旣無間然。而舉其功則其所以立仁義之道。使天理明而人心正。天敘勅而五典惇。

- 則其深切著明。範圍天地者。豈下於春秋哉。是宜追崇尊尙。形容德美。加隆廟儀。以爲百世不遷之宗。〈中略〉夫百世不遷。苟無其禮則已。如曰有之。則匪我孝廟而伊誰。臣於孝廟禮陟之後。即欲以此請於先大王。而事體重大。不敢輕議。故因循至今矣。今則衰病沈痼。朝夕就木。終若不言而死。則負罪罔極。挽河難洗。而適會聖明奮發大志。召致儒賢。所與都兪者。不出春秋之義。〔請以孝宗大王廟爲世室疏〕『宋子大全』卷十七〕
- 23 掌令宋時烈被召赴朝。累上章乞還。優批不許。於是時烈詣闕謝命仍請入對。上適有疾不見。時烈自臺廳脫朝衣直出國門。投疏而去。上大驚。即召六承旨謂曰。時烈因予病未引接。遽決歸計。誰能爲予留之。同副承旨金益熙素親時烈。請以聖旨追及諭之。上喜而許之。時烈聞上意甚懇。還到城外陳疏謝罪。仍請歸愈力。上下教于政院曰。予之待賢可謂不誠。平日敬禮之意無以自暴。承旨代予草教。諭以至意。使山林高世之士少回退心。特遣禮曹郎官傳諭時烈。時烈已投疏而去矣。〔『孝宗大王實錄』卷一孝宗即位年六月甲寅〕
- 24 臨命時。執門人權尙夏手托之曰。學問當主朱子。事業則當以孝廟所欲爲之志爲主。〔『肅宗大王實錄』卷二十一肅宗十五年六月戊辰。また、尹鳳九「宋時烈墓誌」『宋子大全』續拾遺附錄卷之二〕
- 25 夫孝廟所欲爲者。即春秋之義也。〔尹鳳九「宋時烈墓誌」『宋子大全』續拾遺附錄卷之二〕
- 26 我孝宗大王以天縱之聖。當陽九之世。痛天地之顛覆。憤冠屨之顛倒。秉春秋之大義。〔宋時烈「自耽羅就拿出陸後遺疏己巳五月」『宋子大全』卷之二十〕
- 27 我孝宗大王以藩邦而明春秋大義哉。〔同上〕
- 28 至於洪翼漢等三學士。權順長等三儒生之死。及砲手李士龍之死。亦足以有光於春秋之義矣。〈中略〉孝宗大王則聖心於此大義皎然如青天白日。〔宋時烈「論大義仍陳尹拯事疏 丁卯正月二十八日」『宋子大全』卷之十九〕
- 29 孝廟有大志。知時烈可與共事。遣金益熙密諭聖志。遂契合隆重。稱之以先生。特賜獨對。又夜命顯廟親傳御札。時烈感激奮厲。自樹以春秋大義。〔『肅宗大王實錄』卷二十一肅宗十五年六月戊辰。〕
- 30 夫子之功。未有大於春秋。而春秋之義。未有大於尊王也。〈中略〉春秋之義炳然數十。而尊王之義最大。〔宋時烈「請追上徽號於太廟疏」『宋子大全』卷之十八〕
- 31 春秋之義炳然數十。而尊周爲大。〔宋時烈「執義權公墓誌銘」『宋子大全』卷之一百八十四〕
- 32 夏。會于葵丘。尋盟且脩好。禮也。王使宰孔賜齊侯胙。曰。天子有事于文武。使孔賜伯舅胙。齊侯將下拜。孔曰。且有後命。天子使孔曰。以伯舅耄老。加勞賜一級。無下拜。對曰。天威不遠顔咫尺。小白。余敢貪天子之命。無下拜。恐隕越于下。以遺天子羞。敢不下拜。下拜登受。〔『春秋左氏傳』僖公九年「傳」〕
- 33 『春秋左氏傳』僖公九年「經」
- 34 宋時烈「請以孝宗大王廟爲世室疏 癸亥二月二十一日」『宋子大全』卷之十七
- 35 仁義之說。不行於世久矣。人有談仁義者。則聽之者必以爲迂焉。孰能從而行之。然桓文假之而伯諸侯。唐太宗勉之而致太平。〔『孝宗大王實錄』卷一八孝宗八年五月乙卯〕
- 36 秋。齊侯盟諸侯于葵丘。曰。凡我同盟之人。既盟之後。言歸于好。宰孔先歸。遇晉侯曰。可無會也。齊侯不務德而勤遠略。故北伐山戎。南伐楚。西爲此會也。東略之不知。西則否矣。其在亂乎。君務靖亂。無勤於行。晉侯乃還。〔『春秋左氏傳』僖公九年「傳」〕
- 37 子曰。晉文公譎而不正。齊桓公正而不譎。子路曰。桓公桓公殺公子糾。召忽死之。管仲不死。曰。未仁乎。子曰。

桓公九合諸侯。不以兵車。管仲之力也。如其仁。如其仁。子貢曰。管仲非仁者與。桓公殺公子糾。不能死。又相之。子曰。管仲相桓公。霸諸侯。一匡天下。民到于今受其賜。微管仲。吾其被髮左衽矣。豈若匹夫匹婦之為諒也。自經於溝瀆而莫之知也。（「憲問」『論語』）

38 孟子對曰。仲尼之徒。無道桓文之事者。是以後世無傳焉。（「梁惠王章句上」『孟子』）

39 仲尼之門。五尺之豎子。言羞稱乎五伯。是何也。曰。然。彼誠可羞稱也。（「仲尼篇第七」『荀子』）

40 仲尼之門。五尺童子羞稱五霸。爲其先詐力而後仁義也。（「董仲舒伝」『漢書』卷五十六）

41 （三十五年）秋。復會諸侯於葵丘。益有驕色。周使宰孔會。諸侯頗有叛者。晉侯病。後遇宰孔。宰孔曰。齊侯驕矣。弟無行。（「齊太公世家第二」『史記』世家卷三十二）

42 伏乞。勿以中主自期。以古聖賢爲的。志則志聖賢。心則以孤寡不穀自處。人君之過。莫過於亢。是以齊桓公會葵丘。有驕色。（『孝宗大王實録』卷十四孝宗六年二月己未）

43 所陳之言。無非至論。予用嘉尙。可不體念焉。（同上）

44 注22參照。